

和光大学のカタログ・コレクションについて

三上 豊

1. カタログの収集のはじまり。

あまり美術書がそろってなかったという現実があった。そこで学生に見合った棚揃えと図書館の開架スペースをどうみるかを検討。予算で高額な美術書は十分に買えない。またスペースをとる美術書は敬遠される。着任当時、意外とこちらの希望が館に伝わりやすく、図書館コードにある程度抵触してもいいという判断をいただいた。一人の作家でも、絵画と彫刻は別の棚になるなどは図書館コードを優先した。棚は別でも検索機能「さとる君」では一覧できる。最初は背表紙がある美術館のカタログをメインに考えた。書籍より安く、情報が新しいという利点がある。01年から美術館のカタログおよび束があるもの、04年から本格的に画廊のカタログを入れていった。

一方、大学図書館をどう特色づけるかの課題があがっていた。そういった図書館の改革に乗ったことが大きい。

2. 4人の蔵書の寄贈。

『美術手帖』元編集長の田中氏、彫刻の写真家で有名な野堀氏、美術ライターの池上氏、そして三上の蔵書。それぞれが持っていた本やカタログは少しずつ違う傾向であることがあり、それを寄贈した。

3. 歩いて集めること。地方へ手をのばすこと。

現在でも、基本的には歩いて画廊のものは集めている。一方、購入予算からは地方の美術館に連絡をとり、カタログの在庫リストを取り寄せ選書を行ない、購入または場合によっては寄贈もあり、蔵書を増やしている。関東圏はのぞき、北からはじめて、現在は大阪府まできている。これを繰り返してゆくことで充実をはかる。

4. MOMAのカタログを購入。

2008年に、文科省の私立大等研究設備整備費等補助金で、MOMAのカタログを約300タイトル購入できた。MOMAのものはなるべく揃えていくことを進めている。ただ、海外のカタログよりも本学の特色としては、国内の画廊規模のカタログ収集をやっている

きたい。

なお、棚への配架は 09 年 3 月から変えた。ケースに入れてもとなりの本の重みに耐えられない。ならば作家別に配架していたのを会場別（画廊別）にし、まとめてみることにした。背表紙のあるカタログはこのかぎりではなく、現状のままでいく。この 3 月に変更したばかりなので、まだ使い勝手はまだわからない。

また、3 月から国立情報学研究所も NACSIS-Webcat から検索できるようにした。

略歴

三上豊(みかみ ゆたか)

1951 年東京生まれ。和光大学人文学部芸術学科卒。映画業界での仕事を経て、美術出版社『美術手帖』編集部で 11 年間勤務後、フリーのエディターとして過ごす。スカイドアの美術書、季刊美術雑誌『CAR』の編集を担当。小学館で『世界美術大全集西洋篇』、『日本美術館』、『西洋美術館』、『週刊美術館』などの編集に関わる。一方、画廊史のドキュメンテーションを手掛け『資生堂ギャラリー75 年史』の編集に参加。並行して貸画廊の記録集を作成、これまでに『ときわ画廊 1964-1998』、『秋山画廊 1963-1970』、『日辰画廊 1979-2002』、『靱ギャラリー 1978-1985』を制作発行している。08 年は『キース・ヘリング / ぼくが信じるアート。ぼくが生きたライフ』(中村キース・ヘリング美術館)、「横浜トリエンナーレ 2008」のガイドブック、カタログの編集などに携わった。2000 年和光大学表現学部芸術学科に着任、現在に至る。